

「青表紙本」と「河内本」について

— 引歌当該箇所を中心に —

伊 東 祐 子

源氏物語の表現を考えるうえで重要なものに、引歌表現がある。

物語の場面にふさわしい古歌を織りこむこの技法は、かなり高度な技法であり、校訂者が新たに能くするところとは考えがたいことから、源氏物語の諸本の性格をうかがう上で、何らかの手掛りになるかと思われる。そこで私は、私見により引歌表現と認定した八七五箇所^(註1)における校異を、青表紙本と河内本について行ない、その限りでの兩本文の比較考察を試みることにした。兩本文は、それぞれの系統での善本として、青表紙本では『源氏物語大成』の底本、河内本では「尾州家本」を用いる。ただし、「大成底本」と「尾州家本」の独自異文は、他の青表紙本諸本、河内本諸本によって改めた場合もある。

なお、校異の結果を検討するにあたっては、引歌の性格によって分類した以下の四種の区分^(註2)に従って行ないたい。

A 引唱歌句が「いりぬるいそ」と、「ぬる夜なければなど」の形で表現され、引歌であることが明示されているもの。

B 引唱歌句が本文と融合し、形式の上からは引歌であることが明示されていないもの。

B1 引歌を前提とすることによって始めて本文の内容が理解できるもの。

B2 引唱歌句を含めた本文だけでひととおり内容が理解できるもの。

イ 引歌の表現と内容の双方を下敷きにしているもの。
ロ 引歌の表現のみを借りているもの。

さて、校異を行なった結果、六九例の異文が認められたが、そのうち、青表紙本・河内本のいずれの本文が適当か、判定のつけにくい異文が四二例ほど認められる。いくつか例をあげよう。(以下、文例は、まず青表紙本の本文を掲げ、河内本との異同箇所を傍線をほどこし、括弧内に河内本の異文を記す。巻名の下の漢数字は『源氏物語大成』の頁数を表わす。また、和歌の引用は『国歌大観』による。)

い はけなきたつの一こゑき、しよりあしまになつむ舟そえならぬおなし人にや(おなし人をや)とことさらおさなくかきなし

給へるも（若紫一七九）

堀江こぐたな、し小舟こぎかへり同じ人にや恋ひわたりなむ

（古今・恋四・732・読入しらす）

右の例は「堀江こぐ」の歌の第四句目が引かれていた場合だが、青表紙本では「おなし人にや」、河内本では「おなし人をや」となっている。ところが、久曾神昇氏の『古今和歌集成立論』によると、この箇所は「志香須賀本」「基俊本」「元永本」「唐紙卷子本・御家切」が「おなし人にや」、「本阿弥切」「大江切・久海切」が「おなし人をや」とあって、引歌である古今集歌そのものに引歌当該箇所と同様な本文の異同が認められるため、青表紙本と河内本のいずれの本文が適当か決することはむずかしい。

はうしおとろくしからすうちならし給てはきか花すり（はきか花すりや）なとうたひ給へ少女八〇）

更衣せむや さきむだちや 我が衣は野原篠原 萩の花摺や

さきむだちや（催馬楽・更衣・21）

この例では、河内本が「催馬楽・更衣」の第五句目をそのまま「はきか花すりやなど」と引用しているのに対し、青表紙本は「はきか花すりなど」と、「や」がみられない。しかし、引用歌句を「と」「など」で明示する引歌の場合、一首の歌句をそのまま引くことが原則とはいえないもの、助詞・助動詞にわずかな改変・省略がみられる場合も多少認められるため、「や」の有無だけでは、青表紙本・河内本の適不適は決しがたい。

山てらの入あひのこゑく（かねのこゑく）にそへてもねなきかちてにそすくし給へ（落標五一〇）

山寺の入相の鐘の声ごとにつふもくれぬと聞くぞ悲しき（拾遺

・哀傷・1329・よみ人しらす）

右は、「山てらの入あひのこゑく」にそへても」と、拾遺集歌が本文にすっかり融合している例である。河内本では「かねのこゑく」とあって、引歌の第二句目をより忠実にふまえていることになるが、物語は齋宮女御が母六条御息所の死を悼む場面、拾遺集歌も「哀傷」の歌であることから、青表紙本のままでも拾遺集歌を引歌としていることは明らかであり、いずれが適当か、一概に判定はつけない。

このように、わずかな異文であって、青表紙本と河内本との適不適の決しにくい四二例は検討の対象からはずし、適不適を検討しうる有意の異文二七例について、具体的に用例を掲げながらみてゆくことにする。（なお、玉上琢弥氏による『源氏物語事典』下巻所収「所引詩歌伝典」に記載されているものは、各グループごとの通し番号を○印で囲んで示した。）

二

まず、Aグループの引歌の校異の結果からみたい。Aグループとは先にも触れたように、引用歌句が「いりぬるいそのと」、「ぬる夜なければなど」の形で表現され、本文に融合しておらず、登場人物なり語り手が意識して引歌を明示している場合であり、読者も必ず一首を想起することが要求されるものである。このグループで認められた異文総数は一四例だが、そのうちの九例は適不適の決しにくいもので、以下の検討から除いた。

A1 から人のそてふることはとおかれとたちるにつけてあはれとはみき大かたには（ナシ）とあるを（紅葉賀二三八）

もえ渡る歎きは春のさがなれば大方にこそ哀れともみれ（後撰
・春中・66・読人しらす）

右の例は、青表紙本によると引歌当該箇所と認められる「大かたには」の五文字が、河内本ではまったく見られないものである。この「大かたには」は、藤壺が光源氏への返歌にそえたもので、引歌の「大方にこそ哀れともみれ」により「自分とは直接関係のないものとして、並一通りには感動しました」の意を補ったものと思われる。光源氏との恋は許されない恋であり、決して洩れるようなことがあってはならなかった。藤壺は光源氏への忍ぶ思いを引歌によっておおいかくし、あくまでも通りいっぺんの贈答としての体をとり繕うとしたのだと考えられる。「大かたには」の落ちている河内本では、こうした藤壺の複雑な内面をうかがわせるよしがなくなってしまう。

A② かたしけなくなれきこえ侍りていとしもと（いと）くやしう
思給へらるゝおりおほくなと（須磨四三四）

思ふとていとこそ人に馴れざらめしか習てぞみねば恋しき（拾
遺・恋四・900・よみ人しらす）

A2も、青表紙本の「いとしもとくやしう」という引歌当該箇所が、河内本では単に「いとくやしう」とあって引歌表現ではなくなっている。ここは、須磨謫居の光源氏を訪れた頭中將の会話で、河内本によると「もつたいなくもお馴染み申しまして、大変後悔される折が多くて」となるが、何故、大変後悔されるのかはつきりしない。「いとしもと」と引歌を明示し、下句「しか習てぞみねば恋しき」をふまえ、「お会いしないと恋しくてたまらないので、いっそあまり馴染みにならない方が良かったと後悔されます」となること

によって、はじめて意味の通る文章となる。

これら二例の場合、青表紙本が的確な引歌表現を用いているのに比べ、河内本では引歌表現が認められず、作中人物の微妙な心づかいが失われてしまったり、言葉足らずな表現となっている。

A③ なそこえさらん（なそこひさらん）とうちすしたまへるを
（若紫一八一）

人しれぬ身は急げども年をへてなどこえ難きあふ坂の関（後撰
・恋三・732・これまざの朝臣）

青表紙本によると「なそこえさらんとうちすしたまへるを」とあるが、玉上氏の（註5）ご論文にしたがえば、「なそこえさらん」は、右の「人しれぬ」の一首を引歌とし、「などこえがたき」を「なぞこえざらん」と改変すること、逢坂の関をどうして越えずにいようぞ、きつと逢おうぞ」と光源氏が決意を示したことになる。この引歌の一首を知らずには、「こえ」という表現がいったい何を越えるのか分からず文意が理解できない。それに対し、河内本の本文「なそこひさらん」の場合、該当すると思われる引歌はみあたらず、また、こちらは引歌なしでも「どうして恋さないでいられようか、いられまい」と、文意が理解できる。両本文を比較してみると、青表紙本が手を加えて複雑な引歌表現の本文に改めたと考ええるより、河内本が「人しれぬ」の一首に気づかず、文意を通すために「こえざらん」を「こひさらん」に改めたと考ええる方が自然かと思う。

A④ さとこほるゝゆき（程）もなになつすゑの（なみこすゑの）
とみゆるなとを（なとおほゆるを）（末摘花二二三）

イ 我袖はなになつ末の松山か空よりなみのこえぬ日はなし

（後撰・恋二・684・土佐）

口 浦ちかくふりくる雪は白浪のすゑの松山こすかとぞ見る

(古今・冬・326・藤原興風)

右は、青表紙本と河内本とでそれぞれ別の引歌によっていることになる場合である。青表紙本の「なにかたつすゑのとみゆる」は、イの土佐歌「我袖は」の第二句目による表現で、「さっとこぼれる雪があたかも空から波が越えるように見える」という意となる。一方、河内本の「なみこすすゑのなと」は、土佐歌を踏まえた表現ではないが明らかに何らかの歌を下敷きとした表現と思われるものの、「なみこすすゑの」という歌句をもつ和歌はみあたらない。口として掲げた興風歌「浦ちかく」の一首は、「花鳥余情」を始め他に七注釈書が指摘しているもので、仮にこの興風歌を河内本がふまえていると考えると、物語での雪の場面と重なり、確かにふさわしくはある。しかし、Aグループの引歌は一句ないし二句程度をそっくり引くことを原則とし、改変がみられる場合でも、わずかに助詞・助動詞の範囲がほとんどで、この場合のように興風歌の一句を引かずに、下句全体から一句をつくり上げるといふような大胆な改変の認められる例はない。こうした点から、土佐歌をふまえた青表紙本の本文の方が本来的で、河内本はこの土佐歌に気づかなかつたものと思われる。

A⑤ いろにゐてたまひてのちはおほたのまつのと(おほたのまつ
の)おもはせたることなくむつかしう聞こえたまふことおほか
れは(胡蝶八〇〇)

恋ひわびぬおほ田の松のおほ方は色に出で、や逢はむといはま
し(古今六帖拾遺・35336)

A5の場合、青表紙本では「おほたのまつのと」と引歌の第二句目

を明示することによって、「恋ひわびぬ」の一首を想起させ、この歌をふまえて、「口に出せず恋情にたえかねている」というような態度ではなく、わずらわしくおっしゃることが多いので」という意味になる。しかし河内本では「おほたのまつ」の思わせたることなくと、引歌を明示する「と」がない。この「と」は、脱字の可能性もあるうかと思われるが、河内本にしたがえば「太田の松のように思わせたることなく」という意味になり、「恋ひわびぬ」の一首を明示した表現ではなくって、文意がはっきりしない。「おほたのまつ」は、「恋ひわびぬ」の一首の第三句目「おほ方」を、音の上から導き出す言葉に過ぎず、「と」があることで始めて一首全体を思い浮かべることができるといふわけで、この場合も青表紙本の方がよりふさわしい本文である。

以上、Aグループの校異の結果をまとめると、全異文数一四例のうち、適不適のつけにくい九例を除く残り五例は、すべて青表紙本の方が適当と思われる、河内本の本文は、何らかの理由により改変された本文である可能性が強いと言える。

三

次に、B1グループについてみてゆくと、B1グループとは、引用歌句が本文と融合し形式の上からは引歌であることが明示されていないが、引歌を前提とせずには物語の文意が通じないもので、Aグループ同様、読者も引歌を想起することが要求されるものである。B1グループで認められた異文は一四例あるが、青表紙本・河内本それぞれの本文の性格を知るうえで有意の異文と思われるものは以下の四例である。

B 1 ① こゝろにはなるゝおりなきころにて心とけたるいたに(とけたるいも)ねられすなむ(空蟬九〇)

君恋ふる涙のこぼる冬の夜は心とけたるいやはねらるゝ(拾遺・恋二・277・よみ人しらす)

右は、青表紙本にしたがえば「こゝろにはなるゝおりなきころにて心とけたるいたにねられす」とつづき、一節の意は「光源氏との夢のようなでき事が」心から離れないこのごろで、心安らかに眠ることさえできない」となる。ところで、「心安らかに眠ること、さえない」という表現は、考えてみると不自然な言い方で、「心安らかな眠りはもちろん普通の眠りさえできない」とあるのが理にかなった表現のはずである。しかし、ここは、この「だに」によって右の拾遺集歌をふまえた表現であることを示唆している。右の「君恋ふる涙のこぼる冬の夜は心とけたるいやはねらるゝ」と歌われている、その心とけたるいもできない、といった文脈だと考えられる。河内本では、「こゝろにはなるゝおりなきころにてとけたるいもねられす」とあって、「心とけたるい」という歌句表現が消え「だに」がみられないことから引歌表現ではなくなり、文意の通るわかりやすい表現になっている。この場合、本来河内本のようなわかりやすい文章だったものを、青表紙本が引歌をふまえた複雑な文章に改めたとは考えにくく、河内本が引歌に気づかず、そのまま文意の通る表現に改めてしまったものといつてよいだろう。

B 1 2 きゝしる人こそ(ものあはれしる人こそは)あなれもゝしきにゆきかふ人のきくはかりやはとて(末摘花二〇三)

琴の音を聞き知る人の有ければ今ぞ立出て緒をすすぐべき(古今六帖・34238)

大輔命婦に琴の音を聞かせて欲しいと言われての、末摘花の返事である。青表紙本の「きゝしる人こそあなれ」は、右の引歌をふまえた表現で、それによって「琴の音を聞き分ける人がいるのでしたらお弾きたいとは思いますが、宮中にお出入りする人が聞くほどにはとても(弾けません)」の意と理解される。河内本の「ものあはれしる人」は、「琴」に内容を限定しない、より一般的な表現と思われるが、河内本では「きゝしる人」が琴を話題にしたこの場面にふさわしい引歌表現であることに気づかず、何を聞き知るのかはつきりしなかったために、引歌を前提としない表現に改めたと考えられる。

B 1 ③ もみちはひとりみ待りにしきくらう(にしきもくちをしう) 思たまふれば(賢木三六〇)

みる人もなくてちりぬる奥山の紅葉はよるの錦なりけり(古今・秋下・297・貫之)

B 3 の場合、青表紙本の「にしきくらう」は貫之歌の「よるの錦」をふまえた表現であるが、引歌を知らずには「暗い」という表現が唐突であつて文意が理解できない。河内本では「にしきもくちをしう」と引歌なしで意味の通る本文となっているが、「にしきもくちをしう」という本文から、校訂者により「にしきくらう」という青表紙本の引歌表現が生み出されたとは考えにくい。

B 1 ④ 秋はよの人のめつる(いろにめつる)女郎花さをしかのつまにすめる秋の露(匂宮一四三七)

名にめで、折れるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな(古今・秋上・226・僧正遍昭)

右の例では、青表紙本が「よの人のめつる女郎花」、河内本が「よ

の人のいろにめつる女郎花」とある。これは、単に「いろに」があるかないか程度の異文のように思われるが、「よの人のめつる」という表現は古今集歌の「名にめで、折れるばかりぞ女郎花」をふまえたもので、「いろにめつる」とある場合は引歌表現とみなせない。また、「よの人のめつる女郎花」につづく「さをしかのつまにすめる萩」も引歌表現と思われることから、この一節はともに引歌を踏まえての対句表現と考えられ、こうした点でも青表紙本の本文の方が本来的ではなかったかと思われる。

以上、B1グループの全異文教一四例のうち、有意の異文とみなした四例の場合、引歌表現の認められない本文を、青表紙本が新たに引歌をふまえての複雑で巧みな文章に改めたとは考えにくいと思ふ。

四

三番目のB2イグループは、引用歌句が本文と融合し、形式の上からは引歌であることが明示されていないうえ、引用歌句を含めた本文だけでひととおり内容が理解できるが、引歌の表現を取り込むことによって同時に引歌の内容をも取り込み、本文の読解や鑑賞に何らかの役割をになわせていると考えられる場合である。このグループで認められた異文は全部で二七例だが、そのうち有意異文は九例である。

B2イ① かへりてはつらくなんかしこき御心さしを思給へられ侍
これもわりなき心のやみになん(ナシ)といひもやらすむせか
へり給ほとに(桐壺一四)

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな(後

撰・雑一・1103・兼輔朝臣)

まず、引歌表現「心のやみ」を含む一節「これもわりなき心のやみになん」が、河内本ではまったく見られない例である。この異文に關しては、吉岡曠先生のご指摘に従わせていただく。それによると、この一節は、かえて桐壺帝の身に余るほどの寵愛がなかったら娘は死なずにてくれたかも知れない、といった母北の方の帝に対する恨み言に続くのであるが、この明らかに道理を忘れたとしか思われない帝に対する恨み言は、兼輔の引歌「子を思ふ道にまどひぬるかな」により、「娘に先立たれた親の悲しみゆえなので」と弁解されることによって始めて納得できるという意味で、この一節は当然あるべき一節ということになる。河内本では、この当然あるべき一節がみられないのだが、その理由は知りがない。ただ、この長い母北の方の繰り言が「くれまどふ心のやみも」とやはり「心のやみ」によって語りはじめられていることから、河内本では重複を避けようとして削除したのかもしれない。

B2イ② 思へともなをあかさりし(ナシ)ゆふかほの露にをくれし
心地をとし月ふれとおほしわすれす(末摘花二〇一)

あかさりし袖のなかにや入りにけむ我が魂のなき心地する(古今・雑下・992・みちのく)

B2イ③ かきりあるみちにもあらずあふをかきりに(ナシ)へた
りゆかんとさためなき世に(須磨三九五)

我が恋は行方もしらすはてもなしあふを限りと思ふばかりぞ
(古今・恋二・611・躬恒)

B2イ④ の例では、青表紙本の引歌表現「あかさりし」の五文字が、河内本にみられず、また、「思へとも・なほあかさりし・ゆふ

かほの・露にをくれし(五・七・五・七)とあたかも和歌を思わせる流れるような調べも失われている。つぎの^{B 2}イ3も、青表紙本によると「我が恋は」の一首を引歌とした表現「あふをかきりに」の七文字が、河内本にない。これら二例の引歌表現は、それぞれ「我が魂のなき心地する」「行方もしらずはてもなし」といった意が含まれた文章と思われるが、河内本では単に事柄を叙すだけの文章となつてしまつているといえる。^{B 2}イ1の例の場合、引歌に気づかなかつたことが原因で、引歌表現を含む一節が落ちてしまつたと考えにくい。これらの場合は、河内本が引歌による表現と気づかずに引用歌句を落としてしまったものかと考えられる。

^{B 2}イ4 やみにくれて(くれやみにて) ふし・つみ給へるほとに草も高くなり(桐壺一一)

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな(後撰・雑一・1103・兼輔朝臣)

右の青表紙本「やみにくれてふし・つみ給へる」は、^{B 2}イ1と同様、兼輔歌を引歌とし、「娘更衣を失つた悲しみで母北の方が心を閉ざされ涙にくれていらつしやる」の意である。河内本では「くれやみ」と一語のようになり、引歌表現ではなくることによって、子を思ふ親心の嘆きを暗示した表現のふくらみが消えている。この兼輔の一首は有名な歌であり、兼輔が紫式部の曾祖父であったことも影響してか、源氏物語ではかなり引かれており、河内本でも知らなかったとは思われないのだが、この^{B 2}イ4は、兼輔の引歌によつた最初の例であるため、あるいは物語の場面にふさわしい引歌表現に気づかなかつたとも想像される。

^{B 2}イ5 ねかひ侍るみちの(みちにも)はたしに(いと)さままたけ

とや)思たまへられぬへき(なりはへらむ) なときこえ給へり
(若紫一七八)

世の憂め見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ
(古今・雑下・955・物部よしな)

北山の尼君の会話文である。青表紙本にしたがえば「(心細いありさまのまま若紫をこの世に残してゆくのが)願います往生の支障と思わずにはいられないのでございまして」の意になるが、「さまたげ」とある河内本の場合も、一見すると意味的には大差がないように思われる。しかし、青表紙本の「ほだし」が、引歌と同様、尼君が「思ふ人(若紫)」を不す語であるのに対し、河内本の「さまたげ」は、この場面とは異なる語であるらしい。「さまたげ」の用例は源氏物語中に全部で四例認められるが、そのうち二例は「物のさまたげ」で単に物の怪の妨害を意味する。他の二例は、成仏の支障の意で使われているものの、悪い評判・悪い思われを指して使っており、この場合、いとおしくてたまらぬ孫娘の若紫を尼君が「さまたげ」というとは考えられず、河内本は「ほだし」が物語の場面に適した引歌表現であることに気づかずに、より平明な表現に改めたのだと思うが、結果としては源氏物語の用法からはずれてしまつている。また、この「ほだし」という引歌表現は源氏物語ではかなり用いられているが、その最初の用例がこの若紫の例で、それ以降「ほだし」に関する異文は認められないことも河内本の校訂態度の一端をうかがわせよう。

^{B 2}イ6 きさいの宮もひとゝころにおはするころなればけはひい
とおそろしけれとかゝることしまさる御くせなれはいとしの
ひて(しのひつゝ)たひかさなりゆけは(よなく)かさなり

ぬ)けしきみる人々もあるへかめれと(賢木三七五)

逢ふ事を阿漕の島に曳網のたび重ならば人も知りなむ(古今六帖・32381)

癩病かさねをわづらうて里下がり(右大臣邸)をしている麗月夜内侍と、

光源氏との密会のようなすを述べた一節である。青表紙本の本文と右の古今六帖歌を比較すると、「たひかさなりゆけはけしきみる人々もあるへかめれ」と、六帖歌の下句「たび重ならば人も知りなむ」とが重なりあう点がまず指摘できるが、六帖歌の表現のなかで、物語本文と関係がないように思われる第二・三句目「阿漕の島に曳網の」について考えよう。「阿漕」は、「阿漕の浦」のごとで三重県津市南部に位置するが、この浦は伊勢神宮に供える神饌を捕るため一般に対しては禁漁地とされていた。そこから「阿漕の島に曳網の」は、禁を犯して漁をするように、人に知れることがないように、ひそかに、といった意味を表わし、下句へは、そのようにひそかにしていても度重なることによって、おのづと人も知ってしまった、と逆接の意でつづいていく。物語本文と無関係かと思われた「阿漕の島に曳網の」も、物語の「いとしのひて」と対応する表現であることから、この一節は明らかに右の一首をふまえた表現とみなされる。「光源氏は」人目をしのび、こっそりなざって(いるのだがそのしのびの逢瀬も)たび重なっていくとそれと気づく人々もあるらしい」とある物語本文は、引歌の内容とほとんど一致するといえるが、物語に引用されなかった「阿漕の島に曳網」のイメージも物語世界に影を落とすかと思われる。光源氏にとって、自分を憎みきらっている弘徽殿太后がおり、また政敵にあたる右大臣邸での密会は、さながら禁漁地・阿漕の浦での密漁でもあったのだ。河内

本では「いとしのひつゝよな／＼かさなりぬけしきみる人々もあるへかめれ」とあって引歌表現とはみなせないのだが、こうした河内本の本文から、引歌を巧みに踏まえた青表紙本の本文に改められたと考えることはむずかしいと思う。

B 2 イ⑦ たゝあたにうちみる人のあさはかなるかたらしひにたに

みなれそなれて(みなれ／＼て)わかるゝほとはたゝならさめ
るを(松風五八三)

みなれ木のみなれそなれてはなれなほこひしからしやこひしか
らんや(未詳)

右の青表紙本「みなれそなれてわかるゝほとはたゝならさめるを」と、「みなれ木の」の一首は、「みなれそなれて」という歌句表現が重なるとともに、親しく馴じみあったものの別れがたい心情を詠んでいる点でも共通している。ところで「みなれそなれて」は、初句「みなれ木(水馴木)」によった表現で、「みなれ」には「見馴れ」と「水馴れ」がかけられており、また「そなれ」は「礎馴れ」を意味するものの、単に語調をととのえるために添えられた語句に過ぎない。このように、「みなれそなれて」という表現は、引歌を知らずにはかなり理解しにくい表現と考えられ、河内本の「みなれ／＼て」という引歌を前提としないわかりやすい表現は、こうしたいきさつから生まれたのではないかと想像させる。

B 2 イ⑧ としころの心もとなさよりもちへに(ちゝに)ものおもひ

かさねてなけき給(夕霧一三三三)

心には千重に思へど人にいはぬ我が恋ひ妻を見むよしもがな
(古今六帖・32843)

この例の場合、青表紙本が「ちへ」、「河内本が「ちゝ」とあって、

わずか一字の異同であり、「へ」と「ゝ」の誤写の可能性がまず考

えられようが、青表紙本の「ちへにものおもひかさねて」は、右の一首の「心には千重に思へど」によつた表現で、落葉宮との關係を雲居雁はじめ世間に公言していない夕霧が、人しれず落葉宮逢いたさに思い嘆くという物語の状況も「心には千重に思へど人にはぬ我が恋ひ妻を見むよしもがな」の意と重なっている。それに対し、

「ちゝ」とある河内本の場合、引歌表現とはみなせない。ところで「ちへ」「ちゝ」のそれぞれについて源氏物語における用例を調べてみると、「ちへ」は、ここに一例みられるのみであるが、「ちゝ」は「ちゝのこかね」「ちゝのやしる」「ちゝにくたけはへる思ひ」の以上三例がみとめられる。そのうち三番目の用例は、「思ひ」を形容している点で、この異同を考えるうえの参考になる。「ちゝにくたける思ひ」とは、「思ひ」を、たとえばガラスのような固休とみなしての表現で、ガラスの破片を決して千重とはいわれないように、砕ける思いは千々々と表現されなければならない。同様に「ちへにものおもひかさねて」の場合、重ね、物思いは千重でなくてはならないのだ。河内本は、「ちへ」が引歌によつた物語場面にふさわしい表現であることに気づかず、どちらかといえば耳なれた、そして数の多いことを示す点のみでは共通する「ちゝ」に置きかえてしまったのかもしれないが、河内本では、「ちへ」と「ちゝ」の表現のもつ微妙な相違が見誤まっている。

B2イ⑨ おほたなふらもきえつゝやみはあやなき(やみなき)たとくしざなれとかたみにきゝさしたまふへくもあらず(早敷一

六八〇)

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るゝ(古今

・春上・41・躬恒)

青表紙本の「やみはあやなきたとくしざなれは」は、躬恒歌をふまえた表現で、宇治の思い出をかたる薰大将と勾宮は、あたりの闇のためお互いの姿がはっきりわからず心もとないの意となるが、躬恒歌の下句「色こそ見えね香やは隠るゝ」により、闇夜にまぎることのない二人の芳香が暗示されている。一方、河内本の「やみなきたとくしざ」は意味が不明であることから、書写段階での不注意な誤脱の可能性が強いと思われる。また、他の河内本諸本五本中、「鳳来寺本」のみが「尾州家本」と同じ「やみなきたとくしざ」の本文をもつことから、「尾州家本」の独自異文ともみなせよう。

B2イグループで認められた全異文数二七例のうち、有意異文の九例は、引歌によつたふくらみのみられる巧みな表現を、河内本が何かしらの理由から改めてしまったものと推定される。

五

最後に、B2ログループの校異を検討するが、このグループは、引用歌句が本文に融合し、引歌を前提としなくとも引用歌句を含めた本文だけでひととおりの内容が理解できる点でB2イグループと類似するが、B2イグループが引歌の表現とともに内容をも物語中に取り込んでいるのに対し、表現のみを借りているものといえる。

B2ログループで認められた異文は全部で一四例あるが、以下に掲げる九例が有意の異同である。

B2ロ① ひま／＼よりみゆるひのひかりはたるよりけに(はたるよりも)ほのかにあはれなり(夕顔一〇五)

夕されは螢よりけにもゆれども光みねばや人のつれなき(古今・恋二・562・紀友則)

B 2 口2 ありかされたぬ(ありかきたまらぬ)ものにてこゝかしこ尋ねけるほとに(夕顔一二六)

風の上にあるか定めぬ塵の身は行方も知らず成りぬべらなり(古今・雑下・989・読人しらず)

B 2 口3 もみちやうくいろつきわたりて秋の野の(枯野の)いとなまめきたるなどみ給て(賢木三五六)

秋の野になまめきたる女郎花あながしがまし花も一時(古今・雑体・1016・僧正遍昭)

B 2 口4 とし月をへはいはほのなか(いはやのなか)にもむかへたてまつらむ(須磨四二八)

いかならむ巖の中に住まばかは世の憂きことの聞えこざらむ(古今・雑下・952・読人しらず)

B 2 口5 煙のいとちかく時くたちくるをこれやあまのしほやくならむ(しほやく)とおほしわたるは(須磨四二八)

すまの海人の塩やく煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり(古今・恋四・708・読人しらず)

B 2 口6 かたみにそへ給ふへきみなれ衣もしほなれたれば(しほなへたれば)としへぬるしるしみせ給へきものなくて(蓬生五三〇)

鈴鹿山伊勢をの海人のすて衣しほなれたりと人やみるらむ(後撰・恋三・719・伊尹朝臣)

B 2 口7 つくろはれたるみつのおとなひかことかましう(かしかましう)きこゆ(松風五九〇)

影みてもうきわが涙落そひてかごとがましき滝の音かな(紫式

B 2 口8 部集・21837) 契りていて給(絵角一六一〇)

若狹なる後瀬の山の後も逢はむわが思ふ人にけふならずとも(古今六帖・32132)

B 2 口9 ねぬる夜の夢に(ねぬる夜夢に)いとさわかしくてみえ給つれば(浮舟一九二四)

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな(古今・恋三・644・業平朝臣)

以上の九例は、いずれも青表紙本では引歌表現であるものが、河内本では引歌表現とみなせない異同である。たとえば、B 2 口3の青表紙本は「もみちやうくいろつきわたりて秋の野のいとなまめきたるなど」とあって、遍昭歌の上句と物語とで「秋の野」「なまめきたる」と表現が重なっている。物語は光源氏の目に映る雲林院の眺めであるが、玉上氏はこの引歌の作者が僧正遍昭であることに注目されて「雲林院は遍昭ゆかりの地として知られているから、この引歌を考えた方がおもしろい」と評されている。また、B 2 口7でも、青表紙本によると、引歌の下句「かごとがましき滝の音かな」と同様に、水の音を「かことかまし」と擬人化した細やかな表現が、河内本では「かしかまし」と、単に「騒々しい」といったそっけない表現となっており、この場合も、河内本から青表紙本へという道筋は考えにくいと思われる。B 2 口8の場合、青表紙本の「のちせを契りていて給」が、河内本では「のちを契りて」となっている。「のちせ」と「のち」と意味的にはほとんど同じなのだろうが、

引歌の「後瀬の山」によつた歌語的表現の細やかなニュアンスを河内本では見落としてしまったものと考えられる。(ちなみに、別本の「横山本」には「のちせのやまを契りて」とある。)このように、これら九例の場合、青表紙本が細やかな引歌表現に改めたと考えられるよりも、河内本が、表現そのものに神経を使うというより文意の解釈に力点を置いていたために、引歌表現とは気づかず、より平明な文章に改めてしまったと考える方が妥当かと思う。

六

さて、以上、引歌当該箇所八七五例において認められた青表紙本と河内本との異文六九例を、仮りに四グループに分け比較検討を行なってきた。六九例のうち四二例は、青表紙本と河内本とで適不適のつけにくい異文として検討の対象からはずしたが、残りの二七例の場合、河内本が改変した可能性が強いと判断されるものが圧倒的であり、その逆に、河内本の方が本来のと思われるものは一例もみあたらなかった。また、A4・A5の二例を除いた二五例は、すべて青表紙本の引歌表現が河内本では引歌表現でなくなっているケースである。こうした結果から引歌当該箇所に関してみると、河内本より青表紙本の方が源氏物語のこまやかな引歌表現を残しているという点で、すぐれた本文であるといふことができると思う。

七

最後に、青表紙本と河内本とで適不適のつけにくい異文として、以上の検討からはずした四二例の異文の所在を示しておく。列挙にあたっては、伊井春樹氏の『源氏物語引歌索引』の通し番号によ

り、巻順に一括した。

桐壺49・帚木89・夕顔3・45・62・若菜2・44・末摘花39・41・紅葉賀23・25・29・34・花宴9・葵17・36・須磨59・明石30・淺標18・24・関屋1・薄雲20・24・少女6・胡蝶14・玉鬘8・常夏5・野分1・行幸13・若菜上47・79・若菜下28・柏木3・夕霧3・御法7・幻33・句宮2・総角30・宿木31・東屋25・蜻蛉36・手習18

註1 「源氏物語の引歌について」(学習院大学国語国文学会

「国語国文学会誌」第23号、昭55・3)

註2 右に同じ。

註3 催馬楽の引用は『古代歌謡集』(古典文学大系)によつた。

註4 拾遺集歌「思ふとて」の一首と物語本文とでは、「いとこそ」「いとしも」と多少の異同がみられるが、この拾遺集歌を引歌とする例は物語中他に夕顔の巻に一例みとめられ、その場合も「いとしも人にとくやしくなん」と引用されていることから、第二句目が「いとしも人」とある本文も伝わっていたかと推定される。

註5 玉上琢弥氏「源氏物語の引歌——その種々相——」(『国語国文』昭33・8、『源氏物語研究』所収)

註6 「太田の松」を詠んだ歌は『国歌大観』によると前掲の「恋ひわびぬ」の一首の他に、「ふたばより今はおほたの松のはのいくよか若をこひてへぬらん」(兼盛集)がみられ、この点からも「おほたのまつのおもわせたることなく」の本文によって「恋ひわびぬ」の一首を確実に想起す

るのはむずかしいと思われる。

註7 B12の例については、玉上琢弥氏「源氏物語の引き

歌——木摘花の巻頭——」（『国語国文』昭33・10、『源氏物語研究』所収）に詳細な解説がある。

註8 和歌の引用は「源氏釈」（前田家本、『源氏物語大成』所収）によった。

註9 玉上琢弥氏『源氏物語評釈』第2巻

付記

この稿は、昭和五十五年中古文学会秋季大会において口頭発表したものをまとめたものである。発表に際し、種々ご教示いただいた諸先生方に厚く御礼申し上げます。